

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報 [号外] 2009年7月1日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合) 【No.26】

松崎明秘録』は革マル内の主流派・JR派の対立を明記！

JR総連と革マル派との「対立」の検証として、動労第4代青年部長の上野孝氏の拉致・監禁事件をさらにみていく。「松崎明秘録」には、脚注として、以下の記述がある (p.103)。

革マルによるリンチ 動労第4代青年部長であった上野孝が、革マル派によって拉致され、2年半にわたって監禁されていた事件を指す。「上野孝を偲ぶ」と題する碑文は、上野が「自ら信じていた党 [革マルのこと] に裏切られ、て失意の末に死んだことを記し、彼を裏切った党が、9.11 自爆テロを 画歴史的行為』と礼讃し、全世界の労働者・人民から孤立し、自爆への道へとひた走っているのは、けだし必然ではないか。つねに人民の側に立って、人民の中に深く入り、人民と共に闘い抜いてきた人、上野孝とはそういう男である」と結んでいる。

前号で紹介したように、松崎氏は上野氏らを「うちのメンバー」と呼び、革マル派に「パクられて事実上リンチをくった」と自ら述べている。「革マルはね、最初は分派活動を…」の部分の合わせ考えると、上野氏は革マル派内の対立が原因で拉致・監禁されたと読むことができる。また、解説では、「JR総連革マル派幹部が同派主流に拉致された時」と明記している。つまり、JR総連内に主流ではない別の革マル派幹部のグループがいて、主流派と対立し、そのうちの1人である上野氏の拉致・監禁事件が発生した、と明言しているのである！JR総連がその上野氏を偲び、彼らの本丸・目黒さつき会館の入口に碑を建立している組織を見て、「JR総連と革マル派とは関係ない」と思う者がいるだろうか。

革マル派の中央とJR総連側との内紛は警察資料でも詳述！

革マル派「綾瀬アジト」押収資料に基づく警察資料には、事件の背景となった同派の内紛について以下の詳細な記載がある (宗形明著「異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跎」p.67)。これによると、沖縄に派遣された松崎氏の「うちのメンバー」たる上野氏は、革マル派中央労働者組織委員会の常任委員 (トラジャ) ということになる (No.5 参照)。

平成元年の「3.5 提起」以降続いている組織内の内部思想闘争問題に対し、組織引き締めの陣頭指揮を取っていた黒田寛一は、平成4年に入院をした。この間に、当時の中央指導部が、黒田の意向に反した運動方針を提起 (3.1 提起) もしくは「DI 提起」と呼ばれている) し、これに従って党を運営していたため、黒田は病気回復後、これら指導部を弾劾・肅正し、自らが先頭に立ち組織再建に乗り出した。沖縄県委員会では、「3.5 提起」を受け、組織再建に取り組んでいた県委員長の名が、その指導方針等について中央指導部から全面否定され、「県委員長を解任」されたうえに、軟禁状態でその責任を追及されたことから、M は身の危険を感じて組織逃亡を図った。この間、党中央指導部は、M に代わる指導部を沖縄に派遣したが、M の逃亡が発端となり N 以下の沖縄県委員会の地元指導部のほとんどが、党中央指導部に反発する行動に出たため、黒田は、中央労働者組織委員会から「JR出身の常任委員数名」を事態收拾のため沖縄に派遣した。しかし、この者らは N 以下の地方幹部の方針に同調し、中央に残っていた他の「JR出身の中央労働者組織委員会常任委員」もこれに加担するようになったうえ、指揮下にある JR 委員会をも巻き込み、反中央意識を煽り、機関紙の購読拒否やカンパの上納停止を行わせるなどの事態にまで発展していった。